

## 第4回

監修・執筆 水島 司

# 古代インド ～仏教とアショーカ王～

### 今回学ぶこと

2千数百年前のインドで釈迦（ガウタマ・シッダールタ／ブッダ）が生まれ、仏教が誕生した。仏教は、その後世界の三大宗教となり、日本人の信仰にも大きな影響を与えてきている。今回は、始めに仏教がどのような社会背景の下で生まれ、何を唱え、どのような人々に、なぜ支持されたのか、仏教はどのように実践されたのか、アショーカ王はどのようにして仏教を広めようとしたのかを見ていく。

### 調べておこう・覚えておこう

- インドを起源として現在まで日本や世界に伝わっているどのようなものがあるか調べてみよう。
- 仏教を学ぶためにインドへ向かった日本人の試みの歴史を調べてみよう。
- 世界の三大宗教と呼ばれているキリスト教、イスラム教、仏教徒の数の国毎の構成を調べてみよう。

### はじめに

誕生した仏教は、インドでバラモンによる身分差別の考え方に反発する商人を中心にして支持された。この仏教の広がりにも大きな影響力をもったのは、マウリヤ朝の王でインドの最初の統一王朝を築いたアショーカ王であった。征服戦争の過程で多くの殺りくを繰り返した王は、仏教徒へと改宗し、極めて熱心な仏教の擁護者となった。

仏教は、しかし、その後インドから消えてしまう。いったい、インドの仏教に何が起きてしまったのか、仏教を支持し、そして排除していったインド社会とはどのような社会だったのだろうか。インドから追い出された仏教は、その後主な活動場所をインドの外部に移した。アジア各地、とりわけ東南アジアへと広がっていった仏教は、その後現在に至るまで、千数百年間にわたって影響力を持ち続けてきた。仏教を通じて、インドとアジアとのつながり、極めて強い持続力をもつ世界宗教の国家や民衆にとっての意味や役割について考えてみよう。

### 世界宗教の生成

紀元前6世紀、ガンジス川流域ではいくつもの都市や王国が生まれた。そこで最も高い身分だ

と主張したのがバラモンと呼ばれる司祭階層であった。彼らは、厳格な祭式と苦行が救いを得る道だと唱え、それを執り行う自分たちが最高位にあると主張した。こうした考え方に対し、ブッダは苦悩からの救いの道を人々にも可能な形で教え、都市の商工業者を中心に、身分制の下で抑圧されていた人々の共感を得た。

ブッダの教えをインド各地に広げたのは、マウリア国のアショーカ王だった。王は、諸国を征服してインド史上初の大帝国を築き上げたが、その過程で殺りくを繰り返したことを悔やみ、熱心な仏教徒となった。それ以降、武力ではなく、仏教の考えを基礎とする「ダルマ」(法)の政治を目指し、その教えを刻んだ石碑をインド各地に作り、仏教活動を手厚く保護した。

### 仏教の隆盛と伝播

仏教は、アジア各地に広がっていた。東アジアには、中国や朝鮮半島を経て、6世紀には日本にまで伝えられていた。東アジアの国々からは、仏教の教えを求めて玄奘や義浄などの中国僧がインドを訪れ、そこで学んだ教えを持ち帰り、人々の間に伝えた。東南アジアには、アショーカ王の息子の代にまずスリランカに伝えられ、そこから東南アジア各地に広まっていた。そこでは国家の支配と結びつき、巨大な建造物も築かれた。

現在、仏教徒の数は数億を数え、キリスト教やイスラーム教に並んで、世界の三大宗教としてアジアを中心として広く信仰されている。

### 仏教のインドでの消滅

仏教は、アジア各地に広まる一方、インドでは5世紀ごろから衰退し始めた。衰退の仏教自身の要因としては、支持基盤の弱体化がある。仏教は世俗から離れた場所で修行を行う出家主義をとっていたが、これらの活動を財政的に支えた階層は、バラモンの身分意識に反発し、平等を求めた都市の裕福な商人たちであった。しかし、この時期に商工業が全体的に衰退したため、スポンサーとなった都市の商人たちは、仏教僧やその活動を支え続けることができなくなった。

他方、仏教の外からの要因としては、それまで祭祀と儀礼の絶対性を説いてきたバラモン教の自己改革がある。バラモンたちは、3世紀ごろから民衆の土俗的な世界観をバラモン教に取り入れ、ヒンドゥー教へと変身して人々の支持を得、仏教徒をヒンドゥー教に吸収していった。バラモンたちは、さらに王権とも結びつき、仏教への攻撃を強めた。こうして、ヒンドゥー教の強大化と反比例した形で、仏教は弱体化し、ついには10世紀ごろ、インドに中央アジアからイスラーム勢力が侵入して多くの仏像や寺を破壊し、僧侶たちがチベットやネパールへ逃げたことから、インドで仏教は滅びてしまった。